

[A年] 公現後第2主日(2025年1月19日)

【旧約聖書日課】エゼキエル書 2章1節～3章4節

2¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」²彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。³主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。憐れ知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。⁵彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。⁶人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが反逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではならない。⁷たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは反逆の家なのだ。⁸人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」⁹わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。¹⁰彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

3¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」²わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、³言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。⁴主はわたしに言われた。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。」

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 10章8～11節

⁸すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。」⁹そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」¹⁰わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。¹¹すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」

【福音書日課】マタイによる福音書 4章18～25節

¹⁸イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。¹⁹イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。²⁰二人はすぐに網を捨てて従った。²¹そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。²²この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

²³イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。²⁴そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。²⁵こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エゼキエル書 2章1節～3章4節

2¹主は私に言われた。「人の子よ、自分の足で立ちなさい。私はあなたに語ろう。」²主が語られたとき、霊が私の中に入り、私を自分の足で立たせた。私は、語りかける者に耳を傾けた。

3³主は言われた。「人の子よ、私はあなたをイスラエルの子ら、すなわち、私に逆らう反逆の国民に遣わす。彼らもその先祖も私に背き、今日に至っている。4⁴その子らは恥知らずで強情である。私はあなたを彼らに遣わす。そこで彼らに『主なる神はこう言われる』と言いなさい。5⁵彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、自分たちの間に一人の預言者がいたことを知るようになる。

6⁶人の子よ、あなたは彼らを恐れてはならない。その言葉を恐れてはならない。たとえあなたが、いらくさと棘の中にいて、また、さそりの上に座すとしても、彼らが反逆の家だからといって、その言葉を恐れてはならない。彼らの前におののいてはならない。7⁷彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、私の言葉を語らなければならない。8⁸人の子よ、あなたは私が語ることを聞きなさい。反逆の家のように逆らってはならない。口を開け、私が与えるものを食べなさい。」9⁹私が見ていると、手が私に差し伸べられており、その手には巻物があった。10¹⁰彼が私の前でそれを広げると、そこには表にも裏にも文字が書かれていた。書かれていたのは、哀歌と呻きと嘆きであった。

3¹主は私に言われた。「人の子よ、あなたが見つけたものを食べなさい。この巻物を食べ、行って、イスラエルの家に語りなさい。」²私が口を開けると、主は私にその巻物を食べさせ、³言われた。「人の子よ、私が与えるこの巻物を食べ、それで腹を満たしなさい。」私がそれを食べると、口の中で蜜のように甘かった。

4⁴主は私に言われた。「人の子よ、さあ、イスラエルの家に行き、私の言葉を彼らに語りなさい。

ヨハネの黙示録 10章8～11節

8⁸すると、天から聞こえたあの声、再び私に語りかけて言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」9⁹そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使は私に言った。「それを取って食べなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」10¹⁰そこで私は、その小さな巻物を天使の手から受け取り、すべて食べた。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると腹には苦かった〔直訳→腹が苦くなった〕。11¹¹そして、私に語りかけるのを聞いた。「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて預言しなければならぬ。」

マタイによる福音書 4章18～25節

18¹⁸イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖〔直訳→海〕で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19¹⁹イエスは、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20²⁰二人はすぐに網を捨てて従った。

21²¹そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になり、二人をお呼びになった。22²²彼らはすぐに舟と父を残して、イエスに従った。

23²³イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民衆のありとあらゆる病氣や患いを癒された。24²⁴そこで、イエスの評判がシリア中に広まり、人々がイエスのところへ、いろいろな病氣や痛み、苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々を癒された。25²⁵こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、さらにヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに付いて行った。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・1月19日「公現後第2主日」の日課主題は「最初の弟子たち」。

・旧約聖書日課は、「エゼキエル書」から、預言者の召命を物語る証言箇所。使徒書日課は、「ヨナ根の黙示録」から、僕ヨハネに対する預言を命ずる啓示の箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、漁師たちの召命と初期の宣教活動の様子を伝える箇所。

旧約日課(エゼキエル 2~3 章より)

・「エゼキエル書」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「後の預言者」の第三に置かれた預言文書。前6世紀初頭、南王国ユダのヨヤキン王がバビロンに捕囚として移送されたのに伴い移住したバビロンの地で祭司任職を受け、預言活動をした「祭司ブジの子エゼキエル」の預言句集と活動説話によって構成されている。ヨヤキン王は、前598年のバビロン王ネブカドネツアル(在位=前605~562年)によるエルサレム包囲の際に父ヨヤキム王から王位を継承し、ネブカドネツアル王への忠誠を誓い、エルサレムからバビロンに移された「捕囚王」で、少なくともネブカドネツアル王の後継エビル・メロダク王(=アメル・マルドゥク王)の時代まで身分を保護されて「ユダ・バビロン宮廷」の王として立てられていたとされる(王下 25:27 以下参照)。「祭司エゼキエル」は、この「ユダ・バビロン宮廷」で「ヨヤキン王」に仕える「宮廷預言者」として立てられ、ヨヤキン王(とその後見人であるネブカドネツアル王)の命を受けて預言活動をしていたと考えられる。その活動は当初、ネブカドネツアル王がユダの地に残したエルサレム王権、すなわち「ゼデキヤ王」と「ユダ・エルサレム宮廷」、および彼らを支持する諸部族指導者(イスラエルの長老たち)に対しての宣撫工作がおもな任務であったと考えられる。また、前587年にネブカドネツアル王がエルサレム攻城戦によりエルサレム王権を排除した後は、バビロンに移った人々をおもな対象として、ゼデキヤ王のもとにあったユダ・エルサレム宮廷の過ちを指摘すると共に、ゼデキヤ=エルサレム宮廷が頼ったエジプトをはじめとする諸国に対する批判宣伝がおもな任務であったと考えられる。さらに、晩年には、「捕囚民」によって将来、新しい「エルサレム」が再建されるビジョンを提示し、バビロニア支配化にあるユダの人々になお民族的アイデンティティを維持させるための任務を負っていたと考えられる。

・日課箇所は、エゼキエルがバビロンの地で祭司として任職を受け、それに伴って任務が示されたことを、比喩的に、または儀礼化したものとして描写している。すなわち、バビロニア支配に反抗するユダ・エルサレム宮廷および北部諸部族指導者(=「イスラエルの人々」)に対する懐柔、宣撫、警告を発する一種の広報活動が、祭司エゼキエルの「預言者」としての任務であることが、公的に描かれている。

・「巻物」(メギッラー)は、旧約中では「エレミヤ書」と「ゼカリヤ書」のほかには「詩編」で1例見られるのみの語。「エレミヤ書」の用法に従えば、これは、宮廷書記官などが公的記録として作成した文書を指しており、必ずしも「聖書」を意味しない。

・この「巻物」を巡る日課箇所の一連の描写は、「ヨハネ黙示録」10章でパロディとして採用されている。

使徒書日課(黙示録 10 章より)

・「ヨハネの黙示録」は、新約文書最後に置かれた啓示文書。「僕ヨハネ」がアジア州の七つの教会に対して指導者として書き送った書簡文書の集成という体裁が骨格を成しており、これを「イエス・キリストの黙示」という表題の下に再構成したと考えられる。「僕ヨハネ」について詳細は知られておらず、「使徒ヨハネ」と同定する考えは早くから否定されており、「ヨハネの手紙」の著者である「長老」を「もう一人のヨハネ」と同定する使徒教父文書等に基づいて「長老ヨハネ」とみなす解釈が広く為されてきたが、これに対しても否定的な考えが古い時代からある。このような事情から、本文書は、教会史上長らく、「正典」として他の新約文書と同じ扱いを受けるに至らなかった。西方教会でこれを「正典」として広く認めるようになったのは、ローマ帝国で基督教の国教化が進められていた397年に開催されたカルタゴ会議においてであり、東方諸教会ではようやく10世紀に至ってからである。

・本文書は、著者の問題だけでなく、その文学様式が「黙示文学」という特殊なものであることから、「正典」としての正統性に疑義が呈され続けた。「黙示文学」は、旧約正典では、「ダニエル書」などに見出される東方宗教的な(ゾロアスター教に代表されるような)天上の神的異世界の描写を中心とする啓示文学で、その描写様式から自ずと比喩的解釈が求められるため、ユダヤ教のラビ的伝統では忌避されてきた一方、終末思想と結びついて広く人々の間に浸透していたとされる。終末思想も、東方宗教の影響でユダヤ・キリスト教の中に組み込まれてきた宗教思想である。そのような文学様式の採用にもかかわらず、「ヨハネの黙示録」は、多くの部分が旧約正典文書を敷衍したパロディとして叙述されており、著者が独自の新しい「啓示」を語っているというよりも、イエス・キリストの出来事を旧約正典に基づいて独自に解釈させていることがわかる。

・日課箇所は、「エゼキエル書」2~3章のパロディとして叙述されている。その描写は、詳細に「エゼキエル書」の描写を模倣しているが、敢えて異なる描写を加えている部分もある。「エゼキエル書」が単純に「蜜のように口に甘かった」としていることに対して、本文書は、「口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった」としている。「苦くなる(ピクライノー)」は、8:11でも用いられるほか、「つらく当たる」(コロ 3:19)という訳例もある用語。本書には、信者の生涯における苦難を受容すべきものとする思想がある。

福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、四人の漁師が弟子となったことを伝える説話、および、主イエス一行のカリヤ宣教の概要を伝えるまとめ句である。前半の説話は「共観福音書」がほぼ共通の内容で伝えているが、後半のまとめ句は、「ルカ」が別の文脈に置いている一方で、「マルコ」は一致する並行箇所が見いだされない。

・前半の「四人の漁師の召命」説話は、おそらく「マルコ福音書」のもとになった「ペトロ伝承」において伝えられた「弟子召命譚」であり、二組の漁師兄弟が主イエスに従うようになったことを非常に単純化し、かつ定型化して伝えており、必ずしも実際に起こったことを正確に伝えていないかもしれない。彼らの「召命」に関して、「ルカ福音書」は具体的な事情を追加した伝承を伝え(ルカ 5:1~11)、「ヨハネ福音書」は異なる伝承を伝えている(ヨハネ 1:35~42)。いずれにしても、「共観福音書」の「弟子召命譚」は、「シモン=ペトロ」の視点(自己証言)によるものとして解されるべきであるが、その上で、これを四人に共通の「召命譚」として描くことによって、その出来事における普遍性を示そうとしている、ということもできる。

・19 節「人間をとる漁師にしよう」は、「ルカ」では表現が異なるが(ルカ 5:10)、にもかかわらず「共観福音書」の「弟子召命譚」で共通の鍵となる句となっている。これは、もちろん、彼らが「漁師(アリエウス)」を生業としている者であったことが前提の呼びかけであるが、後に弟子たちの教会で信者を「魚(イクテュス)」に譬えるようになったことと無関係ではない。「イクテュス」は、その綴りの文字を頭文字として「イエス(イエスス)、キリスト(クリストス)、神の(テュウ)、子(ヒュイオス)、救い主(ソーテール)」を意味する隠語として古代教会で用いられたとされている。これによって、最初の弟子ら、殊に「ペトロ」が元漁師であったことの意義が強調されるようになったのだろう。

・後半のまとめ句で示される、「教え(ディダスコ>ディダケー)」、「宣べ伝え(ケリュッソー>ケリュグマ)」、「いやし(テセラペウオー>テセラペイア)」は、主イエスの宣教活動の三本柱として挙げられている。

来週の誕生日 (1月19日~25日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-357「力に満ちたる」(= I 77 番「み神はちからの」)は、22歳で早世した 18-19 世紀英国の詩人 H. ホワイトが、ドイツのカトリック讃美歌集(1784 年版)で「アヴェ・マリア、光り輝く暁の星よ」に付されていた曲に合わせて作詞した讃美歌。

・21-287「ナザレの村里」(= I 272)は、19 世紀英国教会司祭ガーニーの歌詞を自由に翻案してものが『讃美歌』(1931 年版)に採用され歌われてきたが、『讃美歌 21』では大幅に歌詞を改訂している。曲は、18 世紀ロシアの教会音楽家ボルトニャンスキーの作曲だが、ロシア正教会の讃美歌ではない。

・21-516「主の招く声」は、S.ウェスレーに影響を受けて教会音楽家となった 19 世紀英国人パリーのオラトリオ「ユディ」の中の曲で『讃美歌集』(1924 年版)に採用された旋律に、新しい歌詞を付けて歌うべくグリーンが 1981 年に作詞した。英語原詞は 4 節だが、日本語訳では 5 節に拡大してまとめている。

21-357「力に満ちたる」

The Lord of our God is clothed with might

1. The Lord our God is clothed with might, / The winds obey His will; / He speaks, and, in His heavenly height, / The rolling sun stands still.
2. Rebel, ye waves, and o'er the land / With threatening aspect roar; / The Lord uplifts His awful hand, / And chains you to the shore.
3. Howl, winds of night, your force combine; / Without His high behest, / Ye shall not, in the mountain pine, / Disturb the sparrow's nest.
4. His voice sublime is heard afar, / In distant peals it dies; / He yokes the whirlwind to His ear, / And sweeps the howling skies.
5. Ye nations, bend, in reverence bend; / Ye monarchs, wait His nod, / And bid the choral song ascend / To celebrate your God.

21-287「ナザレの村里」

We saw Thee not when Thou didst come

1. We saw thee not when thou didst come / To this poor world of sin and death; / Nor yet beheld thy cottage home, / In that despised Nazareth; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God; / But we believe thy footsteps trod / Its streets and plains, thou Son of God.
2. We saw thee not when lifted high / Amid that wild and savage crew; / Nor heard we that imploring cry, / "Forgive, they know not what they do!" / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun; / But we believe the deed was done, / That shook the earth and veiled the sun.
3. We gazed not in the open tomb / Where once thy mangled body lay; / Nor saw thee in that "upper room," / Nor met thee on the open way; / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?" / But we believe that angels said, / "Why seek the living with the dead?"
4. We walked not with the chosen few / Who saw thee from the earth ascend; / Who raised to heaven their wondering view, / Then low to earth all prostrate bend; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies; / But we believe that human eyes / Beheld that journey to the skies.

21-516「主の招く声」

How clear is our vocation, Lord

1. How clear is our vocation, Lord, / when once we heed your call: / to live according to your word, / and daily learn, refreshed, restored, / that you are Lord of all, / and will not let us fall.
2. But if, forgetful, we should find / your yoke is hard to bear; / if worldly pressures fray the mind, / and love itself cannot unwind / its tangled skein of care: / our inward life repair.
3. We marvel how your saints become / in hindrances more sure; / whose joyful virtues put to shame / the casual way we wear your name, / and by our faults obscure / your power to cleanse and cure.
4. In what you give us, Lord, to do, / together or alone, / in old routines and ventures new, / may we not cease to look to you, / the cross you hung upon / all you endeavored done.